

黻

にもあらず、まかの事ありて、鬼のとりたるなりといひけたば、我その定にしてとらんとて、この次第をこまかにとひければ、をしへつ、このおきな、いふまゝにして、その木のうつばに入てまぢければ、まことにきくやうにして、鬼どもいできたり、るまはりて、酒のみあそびて、いづらおきなは、まいりたるかといひければ、このおきな、おそろしと思ひながら、ゆるぎ出たれば、鬼ども、こゝにおきなまいりて候と申せば、よこ座の鬼、こちまいれ、とくまへ、といへば、さきのおきなよりは、天骨もなく、おろくかなでたりければ、よこ座の鬼、このたびはわろく舞たり、かへすがへすわろし、そのとりたりし、まぢのこぶ返したべといひければ、すゑつかたより、鬼いできて、まぢのこぶかへしたぶぞとて、いまかたのかのほになげつけたりければ、うらうへにこぶつきたるおきな、にこそなりたりけれ、ものうらやみはすまじきことなりとか、

〔倭名類聚抄〕三黻 聲類云、黻北角反、和名布久流、肉憤起也、

〔箋注倭名類聚抄〕三山田本無、又薄駁反四字、那波本同、新撰字鏡、爰字訓不久留、中玉篇、黻、肉、

起也、贗、疑、墳之譌、按說文無黻字、古只用暴字、

〔增補下學集〕上支體、二黻、

〔倭名類聚抄〕三瘰肉 說文云、瘰音息、瘰肉、和名阿萬、寄肉也、

〔箋注倭名類聚抄〕三玉篇、瘰、又作臄、各本作作爲、今依本書通例、改、曲直瀨本無、又作臄三字、那波本

同、醫心方、息肉訓、阿末之々、按、阿末之々、餘肉也、古久美見、大祓詞、其義未詳、中所引、疒部文、按、廣

韻、瘰、惡肉、病源候論云、惡肉者、身裏忽有肉、如小豆突出、細々長、乃如牛馬乳、亦如雞冠之狀、不痒不

痛是也、又玉篇云、瘤、瘰肉也者、統言之也、

〔增補下學集〕上支體、二瘰肉、

〔倭訓栞〕中編、八こくみ 一說に、白人をまらひと、よみ、古久美の美を麗に改めて、新羅人高勾麗

瘰肉